

吉永繁高（著）

百症例式 早期胃癌・早期食道癌 内視鏡拾い上げ
徹底トレーニング

市原 真

JA 北海道厚生連札幌厚生病院病理診断科主任部長

「コンセプトは1,000本ノックですが、さすがに1,000症例用意するのは大変ですし、紙面も足りませんので100本ノックでご容赦いただきましたら幸いです。」（「序」より）

笑ってしまった。そうか、なるほど、本書はノックなのか。どれどれ。

明るく読みやすいデザイン。ポイントごとに用いられる印象的なフォント。冒頭に、吉永繁高先生の実践のかつ具体的な解説がある。野球部の門を叩いた新入部員の手を取って導いてくださるような印象を受ける。グラウンドに入ってグラブを着ける前に、ここまで細やかに「指導」が入るということに、ああ～名コーチだなあ～という感想。消化器内視鏡医にとっての基礎であり要でもある「拾い上げ」とことごとトレーニングしよう、という本書のコンセプトに納得する。じゃ、ノック、体験してみよっかな。これくらいのライトな気持ちで読み始められる。敷居が低い。でもこれは「罨」である。すぐに「百症例式ノック」が始まる。

1例目からものすごい球が飛んできた（比喩）。ひえっ、バックハン

ドでなんとか捕球したつもりが、グラブからこぼれ落ちている（比喩）。解説を読む。この解説がありがたい。一歩目の踏み出し方やグラブの角度などを、1本ノックするたびに解説してもらえる（比喩）。これは現実のノックよりもありがたいポイントだ。泥にまみれてもすぐに体勢を整えて、次の症例、次の症例と進みなくなる。「オナシャス！」と声を上げなくなる。

数例ほど納得のいく「捕球」（比喩）が続いたところで、強烈なライナー（比喩）が飛んできて、横っ飛びしても足がついていかない（比喩）。「げっ、ここかよ……」。癌を見つけられなかった。致命的なエラーである（比喩）。なぜ自分が今回の球を捕れなかったのか（比喩）と、解説を読みながら考える。「難易度 ★★★★★」とある。5段階評価の4番目。えっ、5番目じゃないのかと思わず二度見してしまう。「これくらい見つけないと普通に負けるぞ」と言われているような気持ち。鬼コーチの仁王立ち。まだだ、まだ終わらんよ。

40本、50本、ノックを続けていく。それにしても絶妙の打球だ（比喩）。捕れる気になった途端にギリギリ届かなさそうな、でも訓練すれば捕れそうな球（比喩）。「今のはうまく見つけられた！」と思うと、解説でコーチは分化度や深達度についてコメントしていたり、過去画像との比較を行っていたりもして、その程度で満足するな、と言われているかのようだ。20例ごとに振り返りが入るのもいい。強豪校のノックは構造的である。ただ症例を羅列しただけではなく、通読することで連関が起こるように、緻密に計算されている。索引代わりの巻末キーワードの妙。間違いなく名物ノックである。確実に上達する。

類書はない。得るものが多い。BGMは「栄冠は君に輝く」がふさわしい。いつしか私は汗にまみれていた。最後のは比喩ではない。

●B5/頁 256/2021年 03月

定価：本体 6,300円＋税

[ISBN978-4-260-04328-1]

医学書院 刊